2020年度 川崎医科大学

研究ニュース No.96

Kawasaki Medical School Research News

Meet the Professor

衛生学
大槻 剛巳

きらきらと新緑が眩しい5月中旬，衛生学 教授 大槻剛巳先生のインタビューは，先生のご提案でいつもの学内応接室を飛び出しふるさとの森で和やかに行われました。いつも笑顔で気さくなお人柄の大槻先生。興味の幅の広さに驚かされるとともに，ユーモア溢れる巧みな話術にすっかり引き込まれました。

どのような子供時代を過ごされてきましたか？

生まれは京都府の福知山市です。父親が国鉄の病院に勤めていて，転勤や開業に合わせて2回転校しました。小学校3年生の時，晩秋の頃，友達と神社で遊んでいたら石段を踏み外して頭を打ってしまい，CTも何もない時代だったからとりあえず髄液検査をして2ヶ月くらい入院しました。当時は今と医療が全然違うので，その後もずっと自宅療養をしていました。それからすぐに転校になったので，知らない人たちばかりの中でそれなりに大変な思いをしましたね。

小さいころは勉強をされるタイプだったのでしょうか?それとも外で元気に遊ばれるタイプだったのでしょうか？

勉強はあまりしていなかったと思います。でも，夏休みの宿題は早めに終わらせていました。それで遊ぶタイプ。その性格は今も変わっていません。やるべきことを早く片付けてフリーになりたいんです。

いつ頃から医者を目指されていたのですか？

実は医者になろうと思ったことは無いです。医者になってからは面白いしやりがいも感じています。ここ（川崎医科大学附属高等学校）ができたての頃，パンフレットが家に郵送されてきて，親にとっては高校から医大の附属高校へ入れてしまえば後継ぎができるという安心のために勧められて，たまたま試験に通りました。

まだ高校生の時に親元を離れるのは寂しくありませんでしたか？

寂しさはあまり感じなかったですね。僕たちの時代は高校3年間と大学2年生まで寮でした。

医者以外になりたかった職業はありましたか？

小学校の卒業文集には小説家と書いていました。まだ夢は叶っていません。

川崎医学会誌の投稿促進サイネージにいつも素敵なポエムをご提供いただいていて，とても多才なイメージがあるのですが。

色々と書いてはいますが，まだ何も成果に繋がっていないから書いているうちには入りません（笑）。

部活動はされていましたか？

中学校では陸上部に所属していました。短距離のハードルをしていて，一応京都府で2位になったことがあります。附属高校の時も津山市で開催された新人戦で走ったり，倉敷市の大会に出たりしていました。大学でも陸上部に所属していました。

インタビュー風景

色々な科がある中で，なぜ血液内科を選ばれたのですか？

当時，他の大学では第1内科に入れば第2内科がメインで診療している疾患は診ないなどの部門間の区別がすごくあったように聞いていました。ここ（川崎医科大学附属病院）はそういうのがなくて，全部の科を研修医時代にローテーションするんですよ。その中で，血液内科の病棟の看護師さんが一番可愛かったからです（笑）。

血液内科の魅力はどのようなところですか？

当時は今のように内視鏡や化学療法が進歩していなかったので，癌が見つかれば内科は外科に「癌を切ってください」と頭を下げていました。でも唯一血液内科の領域だけは，内科医が持っている武器（薬）だけで癌を治すんです。それがすごいと思っていました。

血液内科学時代の研究について教えてください。

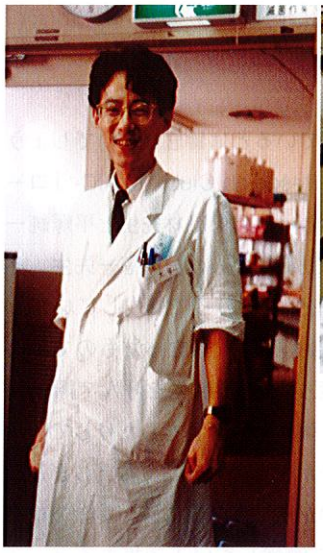
血液内科学に所属していた頃は骨髄腫という病気の細胞株を樹立してきました。おそらく国際的にも一番数を樹立しているラボだったと思います。衛生学で教室を預かる段階で，細胞株は全て大阪の医薬研究所の細胞バンクに譲渡して，うちでは持たないことにしたんです。今でも血液内科学の学会に行くと，骨髄腫の基礎のセッションで若い先生たちが僕たちが樹立した細胞株を使って発表しているのを見かけます。3分の1くらいはうちで作った株で，結構論文で使われているみたいです。

なぜ血液内科学から衛生学に移られたのですか？

大学院生の時や研究で留学していた時に，思っていたよりも自分は実験が好きだということに気づいたからです。

血液内科学と衛生学の両方で研究されていた時期もあったそうですね。

助教授（現在の准教授）から教授になった頃は，血液内科学と衛生学の両方の研究をしていました。両方の学会に出て気づいたのは，小さな庭に2本の大きな木を植えようとしても，養分の取り合いをして両方とも全然育たないということです。それをするくらいならどちらかを排除して，大きな木を1本育てた方がいいと思い，当時ずっとやってきた血液内科学の仕事を已めたんです。



細胞株を樹立していた頃の白衣姿

教授になられると研究をする時間がとれないとよく聞きますがいかがですか？

そうなんです。大学院生の頃，定年前に自分で実験をされている教授を偉いなあと思っていましたが，いざ自分が教授になってみると学内はもちろん学外の学会でも役職がついて研究どころじゃなくなるんですよ。でもそこで気づいたのは，自分一人がいくら頑張っても一日は24時間しかないということです。だけど，教授が研究費を取ってきたり研究テーマを確立してあげたりすることで若い先生が3人頑張ってくれると一日が72時間になる。3倍の仕事が進むわけだから，若い先生が気持ちよく研究できるように教授は太い幹を作って，そこに各自得意分野の枝をバーッと伸ばしてもらう，キャリアアップをしてもらうことが，教授の役目だと思います。

研究ニュース94号で紅林淳一先生が大槻先生と一緒に研究をしていて大変お世話になったとおっしゃっていました。

僕と紅林先生が繋がっているとは皆思わないでしょうね。Kawasaki Oncology Research Club（KORC-「コーク」と呼んでいました）というのを紅林先生と平塚純一先生，当時産婦人科学の助教授だった藤原恵一先生，そして途中から田中克浩先生も加わって結成していました。10年近く毎月勉強会を行い，表立ったものではありませんでしたが，お互いに大学院生を呼んで順番にデータの照会をしたり，論文の抄読会をしたりしていました。紅林先生と一緒にかなりの数の論文も出しましたよ。当時，川崎医科大学がそこまで癌に強いわけではなかったので，癌について勉強したい人で集まろうってなったんです。お互いに違う領域で癌の研究をしている人たちが集まると，自分たちが思ってもみない視点から批判や批評をしてもらえるので，お互いにすごく勉強になったと思います。実験もシェアしていましたね。

衛生学とはどのような学問なのですか？

正直に言うと難しいですね。今でも衛生学と公衆衛生学の違いも曖昧なところがあります。広い意味の社会医学，予防医学と言われている領域は，集団の健康をより高める，病気を予防するということが優先されます。臨床は一人一人の健康の不都合を良くしてあげるということに主眼を置いていますね。例えば，コロナの患者さんの治療をするのは臨床ですが，コロナが広がらないようにするのは衛生学，予防医学ということです。

学生へはどのような指導を心掛けていらっしゃるのですか？

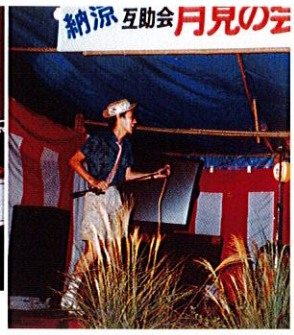
学生が僕自身をリスペクトする部分があるとすれば，年上（きっとご両親より上～僕の同級生のご子弟は，もうほぼ卒業済みです）で，一応，家庭を持って生活をしていることだけです。なので，お互いのポテンシャルで向き合おう！という感じです。なので指導ってことは特にありません。6年間ほど4学年の学年担任もしていましたが，その頃でも古臭い“はがき”などで，一人一人に文面の一部を変えたりしながら，連絡を取っていました。

衛生学のホームページを見ましたが先生は本当に音楽が大好きなんですね。

そうなんです。高校3年生の時にはヤマハが主催しているポピュラーソングコンテストの全国大会に出場しました。友達が作った歌詞に僕がメロディーをつけて「陽だまりの中で」という曲を作ったんです。当時は自作自演部門と譜面部門があって，僕は譜面部門での応募でした。譜面部門で応募すると，ヤマハのボーカルスクールの歌手が歌ってくれるんです。当時歌ってくれたのはデビュー前の庄野真代さんでした。ただ僕自身は，高校最後の文化祭と全国大会がかぶってしまっていて，全国大会の会場には行きませんでした。仲間4人でバンドを組んで，高校最後の文化祭に向けビートルズのアビーロードを一生懸命に練習していたので，僕一人のためだけに文化祭の出場を没にすることはできませんでした。結局グランプリは，チューインガムのお二人で，八神純子さんが優秀曲賞でした。僕の曲は選ばれませんでしたが，今でもポピュラーソングコンテスト第8回出場者の欄（WEBで検索可能）に僕の名前はちゃんと載っているんですよ。

1975年，大学祭（学園祭）での仮装行列（十字架にはりつけられたキリスト）

1981年，軽音楽部と一緒に出場した新入生歓迎コンサート



1987年，月見の会（納涼大会）でチャゲと石川優子の「ふたりの愛ランド」を熱唱

全国大会に出場されるなんてすごいですね!

全国大会に出た曲は当時ヤマハが提供していたコッキーポップというラジオの深夜放送で流れるのですが，東日本大震災の後くらいに滋賀県で医者をされている方から突然衛生学教室宛にメールが届いたんです。その方がおっしゃるには，当時深夜ラジオを聴きながら勉強をしていた時にたまたま流れていた曲に心を動かされて，録音したカセットテープを何度も聴いていたそうなんです。カセットテープは月日が流れるうちに聴けなくなってしまったけれど，それでもその曲は自分の記憶に残り続けている。そして3.11のようなことが起きれば，いつ命がどうなるかなんて分からない。だから自分がその曲が大好きだったこと，自分の中の溢れる想いを相手に伝えておかないといけないと思われたそうなんです。お気づきだと思いますが，その曲は，僕が作曲した「陽だまりの中で」でした。僕はコンテストに応募する時に名前をひらがなで「おおつきたけみ」と書いていたのですが，その名前をいくら検索してみても川崎医科大学 衛生学の教授しか出てこないので，衛生学教室のHPを確認してみたら音楽のことだらけだったからもうこの人しかいない！と思って連絡をくださったそうです。もう35年くらい経っていたので，鳥肌が立つくらい驚きました。本当に嬉しかったですね。

座右の銘はありますか？

「雲心月性」です。あの雲や月のように清らかな心を持つこと。名誉や利益を求めず，超然としていることとか，無欲であることみたいな意味合いです。

最後に医者を志している方へメッセージをお願いします。

「生き様を見ろ」です。僕が学生の頃，出会った先生方の中で，医学医療の部分でタレント性の大きさを感じる先生が何名かいらっしゃいました。そういうマルチな生き方に感銘を受けて自分も頑張ろうと思えました。若い人には自分が感じたまま進んでいってほしいと思いますね。

まさに「マルチタレント」という言葉がピッタリ当てはまりますね。
本日は屋外でのびのびと楽しいお話を聞かせてくださりありがとうございました。

【略歴】

1981年　川崎医科大学　卒業
　　川崎医科大学附属病院　内科研修医
1983年　川崎医科大学内科血液部門　臨床助手
1985年　川崎医科大学大学院医学研究科血球生化学入学
1986年　東京大学医科学研究所病態薬理学国内留学
1989年　医学博士号取得
　　川崎医科大学内科血液部門　臨床助手
1991年　同　講師
1992年　ミネソタ大学血液内科　Research Scholar
1993年　米国国立癌研究所病理研究室血液病理部門 Visiting Fellow
1995年　同　Visiting Associate
1996年　川崎医科大学衛生学　講師
1997年　同　助教授
2003年　同　教授

編集後記

今年度も無事研究ニュース96号を皆さまのお手元にお届けすることができました。今回の表紙も腎臓・高血圧内科学 柏原 直樹教授にご提供いただきました。レンガ造りの重厚感のあるカフェ。語らう人たち。とても素敵な時間が流れています。

今号は皆さまにいただきましたアンケートを元に新企画を2つ掲載しております。

1つ目は大学院生による「Physician Scientist Start up」です。消化管内科学 勝又 諒先生にドイツ留学に行かれるまでの経緯，滞在中の出来事についてなどご執筆いただきました。今回の研究ニュースでは多くの先生方が新型コロナウイルスについて触れられています。勝又先生もドイツ滞在中での手続きや医療現場のことなど詳しくご執筆くださり，大変だった環境やご心情を思うととても心が痛みました。感染もなく帰国するとお伺いし安堵致しております。

2つ目は教室の研究補助員さんによる「研究室の内側　～補助員はミタ～」です。精神科学教室研究補助員 中村 歩さんに，1日の仕事の流れや先生方へのサポートについてなどご執筆いただきました。同じ職員としてとても勉強になりました。印象に残った「ポリグリップ」のお話。さすが精神科の先生はおもしろい表現をされるなぁと感嘆致しました。

「Meet the Professor」でインタビューさせていただいたのは，小児科学 教授 尾内 一信先生と衛生学 教授 大槻 剛巳先生です。

現在，本学園の新型コロナウイルス感染対策本部長もされておりご多忙の中にいらっしゃる尾内先生。一番印象に残ったお話は「命の選択」についてでした。高校生の時にすでにそういったことを深くお考えになっていて，小児科を選ばれるきっかけにもなったということでした。また，尾内先生は世界の情勢など様々なことに関心を持たれており，そのために求められているニーズは何なのかということも常に考えておられました。先を見据えて今何ができるかを考え行動に移されているお姿に感銘を受けました。他にもたくさんお伺いしたいことがあったのですが，時間オーバーとなり断念しましたが，最後までとても丁寧に質問に答えてくださいました。

大槻先生へのインタビューは，ふるさとの森でインタビューを行うという初めての屋外企画となりました。5月の新緑が美しく茂り色とりどりの花々が咲き誇る中（時々虫も飛んできました），大槻先生から飛び出すお話はそのマルチタレントぶりを物語るものばかりでした！大槻先生とお話しする中で，自分の想いを形にすることの大切さに気付きました。普段感じている何気ない気持ちも，言葉にしたり行動に移したりすることで初めて相手に伝わるものがあります。少し照れくさくても，もっと素直に自分の気持ちを相手に伝えていこうと思いました。今ある日常は「当たり前のもの」ではなく「かけがえのないもの」の巡り合わせだということを教えていただきました。

「Meet the Researcher ～私の研究者としての歩み～」では肝胆膵内科学 教授 日野 啓輔先生にお話を伺いました。知識の無さと緊張とで妙な質問をしてしまい恥ずかしい気持ちでいっぱいでしたが，日野先生はすべての質問に優しく答えてくださいました。日野先生の研究や仲間に対する「愛情」がつまったお話を皆さまにお届けできれば幸いです。

前号では2人しかいなかった編集スタッフですが，今回はなんと5人！その内2人が初めてのインタビューに挑戦してくれました。初々しく素直な質問に他のスタッフも興味深々！見守るつもりがついつい一緒に話に入って盛り上がってしまいました。今後も様々な先生方の研究内容のご紹介や，プライベートに突撃していきたいと思います。そして，普段は見られない一面を知ることで先生方の交流が広がり，川崎医科大学は雰囲気が良く働きやすい職場だと先生方に思っていただけるよう編集スタッフ一同陰ながらお支えできればと思います。

最後になりましたが，お忙しい中ご執筆，インタビュー，撮影にご協力いただきました諸先生方，ご関係の皆さまに心より御礼を申し上げますと共に今後とも「研究ニュース」のさらなる充実のためご意見，ご感想をお寄せいただければ幸いです。

（中央教員秘書室）

川崎医科大学